*From common sense to evidence**Toshikazu Yoshikawa**

常識からエビデンスへ

吉 川 敏 一 *

最近になってスポーツの世界で常識とされていたことが、実は誤りであったことがいくつか知られている。たとえば運動中に水を飲むことが良くないとされ、練習中や試合中には水分の摂取が制限されていた。また、野球でもピッチャーなどは試合後にも肩を冷やさないように注意をしていた。最近になって、これらが誤った考えであることが確認され、運動選手は積極的に水分を十分に補給し、またピッチャーは投球が終了してからは肩をアイシングして冷やしている。

スポーツ界でのこのような誤った常識と同じく、医学界においても数多くの誤った治療や予防法がいまだにまかり通っている。たとえば、鉄が欠乏すれば鉄欠乏性貧血なることから、単純に鉄は必要であり、鉄摂取量の低下はいけないものとの常識が作られた。

ところが最近になって、過剰の鉄が数々の障害を引き起こしていることがわかり、慢性肝炎や肝硬変の治療に瀉血療法が試みられている。また、これらの肝臓病患者に対して、鉄含有量の低い鉄制限食を指導し、良好な治療成績が報告されている。鉄だけでなく、正常と考えられるヒトを中心として作製された、正常範囲を正常と決定し、その範囲でなければ是正する治療法は、はたして正しいのであろうか。慢性炎症が生ずれば血中の鉄は低下傾向を示すが、はたして鉄剤の投与は正しいのであろうか。正しいエビデンスを持った検討が必要である。

常識にとらわれなくてエビデンスをもとに治療法を決定していくには、個々の遺伝子解析からのアプローチが不可欠である。幸い最近のゲノミックスやデータ処理を中心としたバイオインフォマティクスの発展には目を見張るものがある。DNAチップや蛋白チップなどの技術的発展に支えられたDNAや蛋白質の変化が個人差として網羅的に確認できるようになった。これらの最新の手法をもって個人個人に応じたテーラーメイドの治療や予防が可能となり、エビデンスに基づいた治療方針の決定が夢ではなくなった。

これらの新しい手法は、ゲノム創薬につながり、テーラーメイドの治療の確立がなされるものと思われる。このことから医学界の常識のうち、いくつかの誤りが発見されていくのか、今から大いに注目する必要がある。

一方、その逆に伝承的に体に良いとされていたが、実際には評価されずに実用化に至っていない治療法も、その効果を新たに証明することが可能となるであろう。このような現在、科学的根拠に乏しい治療法でも、ゲノミックス、プロテオミックスなどの手法を用いた疾患関連バイオマーカーの発見によって、その効果を証明できる。この疾患関連バイオマーカーの検索と、それに続く疾患予防機能法の確立を目指し、ベンチャー会社である

*First Department of Medicine, Kyoto Prefectural University of Medicine 京都府立医科大学第一内科

(株)バイオマーカーサイエンス社を昨年末に立ち上げた。この産学連携プロジェクトを通して伝承的な常識からエビデンスに基づいた新しい、かつ正しい予防機能や治療法が数多く発見できるものと考えている。古くからの常識はやはり正しかったと説明することも、われわれの使命ではなかろうか。